

2 家庭，地域との連携

家庭や地域社会と共に児童生徒を育てるためには、児童生徒の生き方、働き方が日常生活の様々な場面で話題になるよう、学校便りや学級通信、連絡ノート、個人カルテ、電話連絡などにより、児童生徒の状況についての情報の発信、共有を推進することが大切である。

次に示すのは、家庭との連携を図った小学校の学級通信の事例である。

3年2

あっぱれ

平成19年7月10日(水)

3種類の学級活動

今日は、「おうちの手伝いもがんばるよ」「勉強もがんばるよ」という子どもたちが決めた目標を、むね 具体的にこなす活動をしました。

一人一人、いきなり、書くスペースが足りなくなってくるくらいたくさん決めています。一人一人、上へ上へ進んでいるのがよく見えます。

● 決められた目標を達成していく力 が 重要になります。

● この力を伸ばすために…
見届け や 適切な動き (アドバイス)、認めること が 大切なので、担任の先生 が 中心になって、子どもたちを支援して いきます。

● 地域や家庭に おかあさん があります…
保護者のみなさんに 支援していただき、その内態を しっかりと 伝えていっていただき、ありがとうございます。 上へ上へ 書き込んでください。

● この日は…
決めたことを 実践していき、力 が 重要になります。

● この力を伸ばすために…
見届け や 適切な動き (アドバイス)、認めること が 大切なので、担任の先生 が 中心になって、子どもたちを支援して いきます。

● 地域や家庭に おかあさん があります…
保護者のみなさんに 支援していただき、その内態を しっかりと 伝えていっていただき、ありがとうございます。 上へ上へ 書き込んでください。

学校からの一方的な情報提供だけでは連携にはなりません。やはり家庭からも情報提供をしてもらうことが大切です。その場合、本事例のように相談ノートを用意することも考えられますが、まずは、生活ノートの活用を検討してみることが大切です。そして、連携は単発に終わらないよう、継続して取り組む必要があります。

3年4

あっぱれ

平成19年7月(金)

相談ノートへの記入
ありがとうございます

夏休みの子どもたちの様子もたくさん知ることができました。「嫌いな食べ物は手放しに頑張るようになった」「地域の行事に参加していた」「おれんじのり、自分のこと、頑張るようになった」など、子どもたちが頑張る前向きにチャレンジしているという感想が たくさんあります。

これから 子どもたちの がんばっている様子や成長を感じて 報告したい たくさん 願っています。

今日の授業「道徳」

最後まであきらめない心、やり続けることの大切さ、努力し続けることが できるようになるには たくさん 頑張る や 考え や 大切なのを ねじについて 話し合いました。 ロケットレース リンゴの 競争 マラソン選手 アンチドーピングの資料も使いました。

ご家庭でも 話題にしてください。 よろしく お願いいたします。

まずは、学校での授業の内容を家庭に知らせることが大切です。そして、学校で学習していることを、次に家庭で話題にできるように、具体的な内容で知らせるようにしたいものです。その場合、教師の教育方針や教育方法などを学級通信等に記載して、保護者に理解してもらう必要もあります。

3年3 (保護者用)

あっぱれ

平成19年7月20日(水)

夏休み中のおうちの様子を 絵に 載せてください

お子さんは、目標達成のために 努力をしているでしょうか。特に、「地域の行事に頑張るよ」「早起き」「おれんじのり」などの目標を、実践させているのです。下記のことばに 答えられ、引き継ぎ、良いアドバイスを お願いします。

1. お子さんが 設定した 目標を 再度 確認してください。
2. お子さんの 「したい部分」が、保護者の みなさまと 意見が 合っている、まずは 認めてあげてください。大事なものは「今までの 自分から 目標まで」が できることです。
3. 何と どのように がんばっているか、おうちで 褒めてあげてください。 (相談ノートに記入、別紙印刷可) 8月21日(月) 出版日にお子さんに 渡させていただきます。

でんへ

○○さんは、夏休みの行事も頑張っているようですね。そして、家族や友達との交流も大切にしていることがよく見えます。これからも、お子さんの頑張りを しっかりと 見てあげてください。そして、お子さんの頑張りを しっかりと 見てあげてください。そして、お子さんの頑張りを しっかりと 見てあげてください。

教師の伝えた内容が、児童生徒の日記の内容に反映されています。

児童生徒の目標や考え、学校での出来事なども家庭へ伝えることが大切です。(学校での子どもの変容)

7月30日(日)

うれしかったこと

ピアノのコンクール(本選)が ありました。遂に 本選に出れて私は、予選に 落ちた。今日のために一生懸命練習してききました。51人いて、私は、9番に演奏しました。結果は、奨励賞でした。ゆうしゃう賞は、とらなかつたけれど、賞がとれて、うれしかったです。

保護者から

この頃の様子に 保護者から 励みがありました。おんが 頑張っていることが 自分でも 感じました。おんが 頑張っていることが 自分でも 感じました。おんが 頑張っていることが 自分でも 感じました。

教師が、児童生徒の学校での様子を情報提供したことにより、児童生徒の将来について家庭で話す機会が増えていることが保護者からの返事でうかがえます。つまり、授業内容等に関する個に応じた家庭への情報提供等が、児童生徒の将来について話をするきっかけになっているわけです。(家庭での子どもの変容)

キャリア教育では、「働くこと」や「役割を果たすこと」の意義を学び、なりたい自分に向かって自分自身を高めていくことが、重要な学習目標及び内容である。また、学校での学びと社会との接続を図っていくことは、キャリア教育の主たるテーマでもある。学校が児童生徒の身近な家庭や地域と連携を図ることにより、児童生徒の学習意欲が高まり、自他とのかかわりでの自らの生き方を考えるこ

とになる。そのためには、学校は、積極的に家庭や地域に児童生徒の現状を適切に情報発信するとともに、家庭、地域からも情報を提供してもらうことが重要である。連携は情報共有から始まり、その情報共有は相互に情報を発信・受信することで成り立つものである。

児童生徒にとっては、身の回りの大人からの声掛けこそがなりたい自分を見付け、なりたい自分に向けて努力するきっかけとしてきわめて有効なものとなる。例えば、学校の教育活動全体や地域での各種体験の中で、大人たちが、生きること、働くことに対する自分の思いを直接伝えることで、児童生徒は、生き方や将来のことを心に留め、声を掛けてくれる大人が大勢いること、その大人たちから生き方のヒントがもらえることなどを実感できるのである。そのような機会を設けられるよう、家庭、地域との連携を一層充実していかなければならない。

おわりに

児童生徒が実社会において、明るくたくましい生き方、働き方ができるようにするには、社会の状況や産業構造の変化に主体的に対応するための知識や技能、考え方などを身に付けさせるだけでなく、周囲の人々とのかかわりの中でどう生きることがよいのかという、生き方に対する価値観を見いださせることが重要である。

社会で求められる知識や技能、考え方を身に付けさせることについては、学校教育が主な役割を担ってきた。しかし、生き方に対する価値観については、本来、家庭や地域社会の中で誠実に生き生きと働く大人の姿から見いだしてきたものである。学校教育の中でキャリア教育の推進が求められるようになったのは、児童生徒がそのような大人の姿や思いに触れる機会が減少していることも背景にある。

これらを踏まえながら、本稿では、キャリア教育について基本的な考え方とその実践例を具体的に示した。児童生徒の生き方に対する価値観を明確にするということは、各学校の学校教育目標を実現するためにも大切なことである。地域や児童生徒の実態を踏まえながら、明るくたくましい生き方、働き方を実現できる児童生徒の育成に役立てていただきたい。

【引用・参考文献】

- | | | | |
|---------------------|---|------------------|----------|
| 國分康孝編 | 『カウンセリング事典』 | 誠信書房 | 1996年9月 |
| Benesse教育研究開発センター | 『第3回学習基本調査』 | | 2001年6月 |
| 國分康孝監修 | 『現代カウンセリング事典』 | 金子書房 | 2001年12月 |
| 国立教育政策研究所生徒指導研究センター | 『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について』
(調査研究報告書) | | 平成14年11月 |
| 文部科学省 | 『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、
職業観を育てるために～』 | | 平成16年1月 |
| 三村隆男 | 『キャリア教育入門』 | 実業之日本社 | 2004年10月 |
| Benesse教育研究開発センター | 『第1回子ども生活実態基本調査報告書』 | 研究所報Vol.33 | 2005年9月 |
| 鹿児島県総合教育センター | 『児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるキャリア教育の在り方』
指導資料第1520号 | | 平成18年5月 |
| 厚生労働省職業安定局 | 『若年者の雇用をめぐる情勢について』 | 若者の人間力を高める国民会議資料 | 平成18年11月 |
| Benesse教育研究開発センター | 『若者の仕事生活実態調査報告書 25～35歳の男女を対象に』
研究所報Vol.37 | | 2006年12月 |